

【末廣狩 現代語訳】

ナレーション
(語り)

舞台には、「千年の栄え」の祈りを込めて、色鮮やかに松と竹が描かれていた。若緑のような、年若いシテ(主)役とアド(脇)役が、恥ずかしそうに登場してきて、声を張り上げて、

シテ「太郎冠者は居るか」と言えば、

アド「ハハー、只今、御前に参ります」と、答える。

シテ「おお結構、早かったのね。一寸お使いに行っておくれ」

(太郎冠者の心内)

ご主人様は今日もまた、恋のとりこで、恋文のお使いってことか。返事待つ恋、忍ぶ恋というやつだな。

ちゃんと返事の扇は来たけれど、名前だけしか書いてないらしい。

(女性主人の心内)

ほんとに、あなたの心は白扇のように分からないわ。いつか都合を付けて、出会った頃の扇が緩まぬように固く約束をしてね。

固く締結を結ぶ縁結びは、神様に誓いを立てることなのよ。

雨に濡れた花がより色鮮やかになるように、

涙に濡れて、わたしは花の雨だわ。

(太郎冠者)

へーっ、ご主人様の恋は雨模様か。まあ、春日山が春日大社に傘を差すように、雨なら傘をさせば良いってもんだ。

花吹雪が散る宴会ではさ、皆んな、お酒を飲むだろ？

オレも飲んで差すよ。エッ、差すのは傘で、盃ではないの？

いや、だから、花の盃だっぺー。

花傘だから、良い、ツイーの

ね、そうだろ。大いに、本当に、そうだが。本当、ホントさー。

ナレーション
(語り)

日本中、平和な世の中、心地よい風が吹き、寄せては返す

鼓の波の声は清らかだ。

謡い、かつ舞うことのできる、天子様、ご主人様の御栄えが、

千年も万年も限りなく、扇のように広がってゆきますように。

末広がり以上の、おめでたいことはありません。

令和四年九月六日 大中臣正比呂 拙訳

君が代は限りもあらず 長浜の真砂の数はよみ尽すとも

(古今和歌集 神遊歌)

